

長胴形陶棺の性格と位置づけ

前 田 俊 雄

目次

I. はじめに	31
II. 製作技法と分類・編年	31
III. 分布からみた長胴形陶棺	35
IV. 使用古墳からみた長胴形陶棺	35
V. まとめと今後の課題	38

論文要旨

古墳時代後期に使用される棺の一種に、長胴形陶棺がある。これは通有の亀甲形陶棺や家形陶棺とは異なる、胴部が長大化した甕形の焼き物の専用棺である。

長胴形陶棺は7世紀中葉以降のきわめて限られた期間でのみ使用される。製作技法から大きく3種類に分類されるが、型式を問わず、身と蓋の結束方法の簡素化および全体の小型化という変遷をたどる。

また長胴形陶棺は分布の面で偏りがみられ、奈良県北部に集中するとともに、須恵器生産との関連が考えられる地域に点在する。前者は土師質亀甲形陶棺が集中する地域と重なることから、両者の間には強い関係性がうかがわれる。このことから、のちに土師氏として紐帯をもつ集団ときわめてつながりが強いと考えられる。一方後者は、須恵器窯の近くで、須恵質陶棺の分布域でもあることが多い。このことから須恵器生産との関連が推察される。

このように長胴形陶棺は、特定のアイデンティティをもつ集団と結びつきが強い棺と考えられる。

前田 俊雄 (まえだ としお)

奈良県立橿原考古学研究所 主任研究員

I. はじめに

古墳時代後期になると、多様な陶棺が埋葬に使用される。そのような種類の棺の1つとして、陶棺があげられる。陶棺は複数の脚部を持ち、蓋部が亀甲形と家形に大別されるような箱形を呈するものが典型的とされている(光本 2001 など)。しかしこの形状にあてはまらないものも存在している。そのようなものの一例として長胴形陶棺がある。

長胴形陶棺は、文字通り胴部が長大化した甕形の焼き物の棺である。須恵器の甕や土師器の長胴甕を棺として転用したものも、形状のうえでは長胴形陶棺ともいえようが、本稿ではこれらの転用棺は除外し、当初から棺として使用することを目的として製作されたもののみを、長胴形陶棺として取り扱う。

この種の棺が知られるようになったのは、明治・大正年間である。長胴形陶棺の存在は、その形状の特殊性や数の少なさなどから、注意が払われてきた。明治・大正年間にはすでに各地で出土が報告されている。この際には「円筒形の大甕瓮」・「円筒形土器」(梅原 1917)や「砲弾形陶棺」(森本 1924)と呼称されている。最初期には統一的な呼称はなく、資料の報告ごとに用いられていた呼称が異なっていたことがわかる。このうち「砲弾形陶棺」は以後長らく多くの研究者に用いられている。しかしこれまで陶棺の分類は多数おこなわれてきたなかで、この種の棺は特殊形状とされ、除外されることが一般的であった(木村 1979、間壁 1983 など)。

その後も出土事例が続き、現在では10遺跡15個体¹⁾が知られている(図1・表1)。これらの報告のなかで、特異な形状であり、特殊な存在であることが強調されている。出土例が限られていることもあり、長胴形陶棺に関する研究は事例紹介が中心である。このようななかで、奈良市北部の事例を基に、円筒形陶棺から砲弾形陶棺への変遷の指摘は注目される(鐘方 2016b)。

近年発掘調査によって、長胴形陶棺の使用状況が判明する事例が増加している。このことによって、実際の使用状況の情報が蓄積されはじめた。これらの知見をもとに、長胴形陶棺の性格および位置づけについて検討をおこなう。

II. 製作技法と分類・編年

(1) 製作技法と分類

長胴形陶棺のような大型のものを製作するにあたっては、多くの工程を踏むことになる。製作工程を、各段階に分けていくとおおむね次のとおりである。

第1段階 底部の成形：粘土を円盤状にして、平坦な底部を形成するものと、円盤状の粘土を用いずに、丸みをもった底部をもつものがある。

第2段階 胴部の成形：粘土帯を積み上げ、胴部を形成する。積み上げられる粘土帯は、幅はおおむね15～20cmである。

第3段階 頂部の形成：別づくりの頂部は先端を絞り、粘土を積み上げることによって形成する。この頂部を胴部と接合し、全体を形成する。一方で、この頂部を接合せず、蓋として用い、その受け部を作りつけるものも存在する。

また成形後の調整技法に、大きく2通りの手法が確認できる。すなわち内外面ともにタタキが施されるものと、タタキは施されずナデおよびハケメによる調整が施されるものである。このタタキ調整は、須恵器で用いられる製作技法である。長胴形陶棺は、須恵器製作技術が使用されるかどうかによって、2種に大別される。

表1 長胴形陶棺一覧

遺跡名		所在地	型式	時期
昼飯丸山		岐阜県大垣市	IIb1	飛鳥II
新開西3号墳		滋賀県栗東市	IIb1	飛鳥II
寺山古墳		滋賀県守山市	IIb1	飛鳥III?
原山4号墓	1号棺	大阪府堺市	IIb1	飛鳥IV
	2号棺		IIb1	飛鳥IV
沢の浦2号墳		兵庫県丹波篠山市	IIb1	飛鳥III
赤田9号横穴墓	A号棺	奈良県奈良市	Ia2	飛鳥II
	B号棺		Ia2	飛鳥II
赤田18号横穴墓		奈良県奈良市	Ia2	—
宝来6号横穴墓	1号棺	奈良県奈良市	Ib2	飛鳥III?
	2号棺		Ib2	飛鳥III?
	3号棺		Ib2	飛鳥III?
	4号棺		Ib2	飛鳥III?
中町		奈良県奈良市	Ia2	飛鳥III?
萱生		奈良県天理市	IIb1	不明

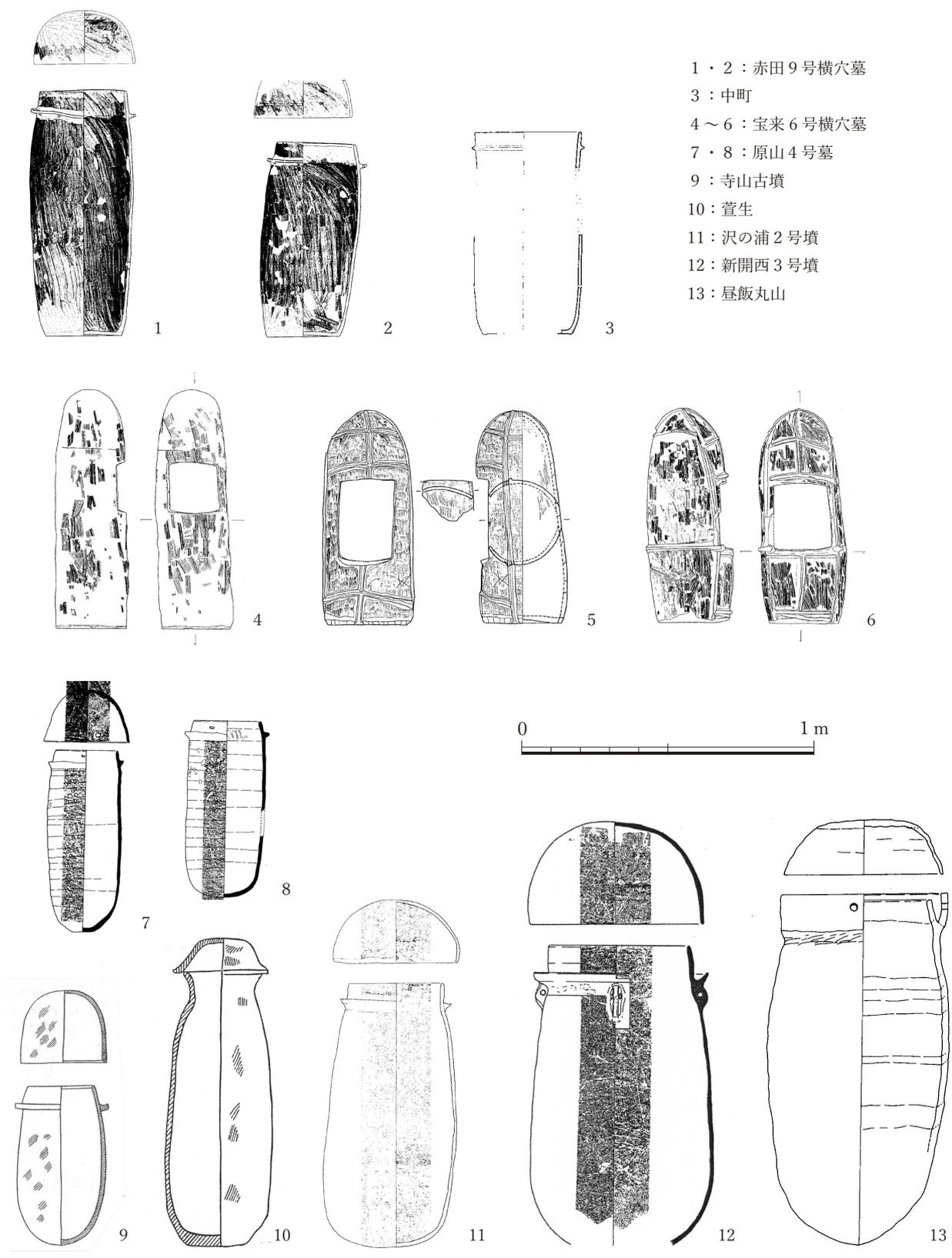


図1 長胴形陶棺集成

大まかな長胴形陶棺の製作工程・技法は上記のとおりである。この製作工程をもとに、長胴形陶棺の分類をおこなう。最も大きな分類差異は底部の成形方法に求められる。

すなわち円盤状粘土を用い、そこから体部を積み上げていくものと、丸底になり、そこから体部を積み上げていくものである。ここでは前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。

また頂部の成形方法について、接合せずに胴部と蓋に分かれるものと、頂部を接合し、全体を一体とするものに分類され、ここでは前者をa類、後者をb類とする。次に製作技法の観点からは、須恵器製作技法の有無により用いられるものを1類、使用されないものを2類とする。

この製作工程・技法による各要素を組み合わせ、長胴形陶棺を分類する。この分類のうち、実際に確認されているものは、Ⅰa2類、Ⅰb2類、Ⅱa1類の3種類である(図2)。

この分類を基に、長胴形陶棺の時期的な変遷を追う。

(2) 型式の時期的変遷

長胴形陶棺が使用されるのは、現状では7世紀中～後

葉のきわめて限られた期間のみである。以下型式ごとにその変遷を追う(図3)。

Ⅰa2類は、飛鳥Ⅱ²⁾から使用される。赤田9号横穴墓例は身の受け部が高く幅も厚い。また受け部には小円孔が複数穿たれており、ここに紐を通して身と蓋を結束したとされる。奈良市中町出土例は身の受け部が赤田9号横穴墓例と比して縮小しており、身と蓋を結束するた

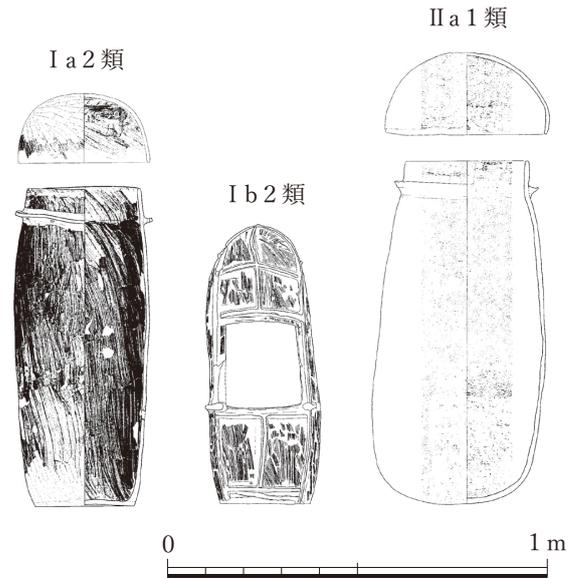


図2 長胴形陶棺の分類

	Ⅰa2類	Ⅰb2類	Ⅱa1類
飛鳥Ⅱ			
飛鳥Ⅲ			
飛鳥Ⅳ	1. 赤田9号横穴墓 2. 中町出土 3. 宝来6号横穴墓 4. 新開西3号墳 5. 沢の浦2号墳 6. 原山4号墓		 遺物スケール S=1/40

図3 長胴形陶棺の変遷

めの紐を通すための小円孔も確認できない。赤田9号横穴墓例に後出すると考えられ、飛鳥Ⅱ～Ⅲに相当すると考えられる。このことからⅠa2類は、飛鳥Ⅱ～Ⅲに使用され、身と蓋の結束方法が簡素化するという流れが読み取れる。

Ⅰb2類は、宝来6号横穴墓出土例のみが該当する。共伴遺物もなく明確な時期は不明であるが、Ⅰa2類の長胴形陶棺の消長から、飛鳥Ⅱ～Ⅲに相当するものと考えられる。身と蓋の結束方法は、痕跡がなく不明である。突帯の貼り付け方によって、時期差が存在する可能性がある。

Ⅱa1類は、飛鳥Ⅱから使用される。新開西3号墳例は、身の蓋受け部下部に小円孔を穿たれた把手を4方向にもつ。この小円孔に紐を通し、身と蓋を結束すると考えられる。また身の形状がやや下膨れとなる点も特徴的である。なお共伴遺物は知られていないが、身と蓋の結束方法から、屋飯丸山出土例もこの時期に位置づけられるが身と蓋の結束方法の複雑さから新開西3号墳例よりは後出すると位置づけたい。飛鳥Ⅲの例として、沢の浦2号墳例があげられる。身と蓋を結束するための小孔等は穿たれない。また身の形状がやや下膨れとなる。飛鳥Ⅳには原山4号墓で引き続き使用される。全体に小型化

し、身の蓋受け部は飛鳥Ⅲ同様、簡素な造りである。また前段階の長胴形陶棺とは異なり、身の形状が直線的となる。Ⅱa1類は、飛鳥Ⅱ～Ⅳに使用され、Ⅰa2類と同様、身と蓋の結束方法が簡素化するという流れが読み取れる。また身の全体形状がやや下膨れするものから直線的なものへ変化する。

このように各型式はいずれも、存続期間がきわめて短い。また個体数も限られているため、型式間の相互関係を追うのは難しい。そのなかでも型式間の相互関係を追うと、さまざまなことがわかる。まずⅠa2類とⅠb2類の関係であるが、両者は身の製作技法が共通で、蓋を別造りにするか、一体とするかというところに差異がある。このため製作段階の省略化という観点から、Ⅰa2類からⅠb2類の長胴形陶棺が派生すると考えられる。このことことは、長胴形陶棺の大きさの面からも補強される。Ⅰa2類の長胴形陶棺は時期を追って小型化が進むが、Ⅰb2類のものはこれよりもさらに小さい。これは従来の指摘（鐘方2016b）を追認するものである。なお長胴形陶棺との共伴事例も存在する土師質亀甲形陶棺でも、小型化の変化が知られている。

次に、Ⅰa類とⅡa類の関係は、両者の間では変化の流れに共通性がみとめられる。1つ目は身と蓋の結束方

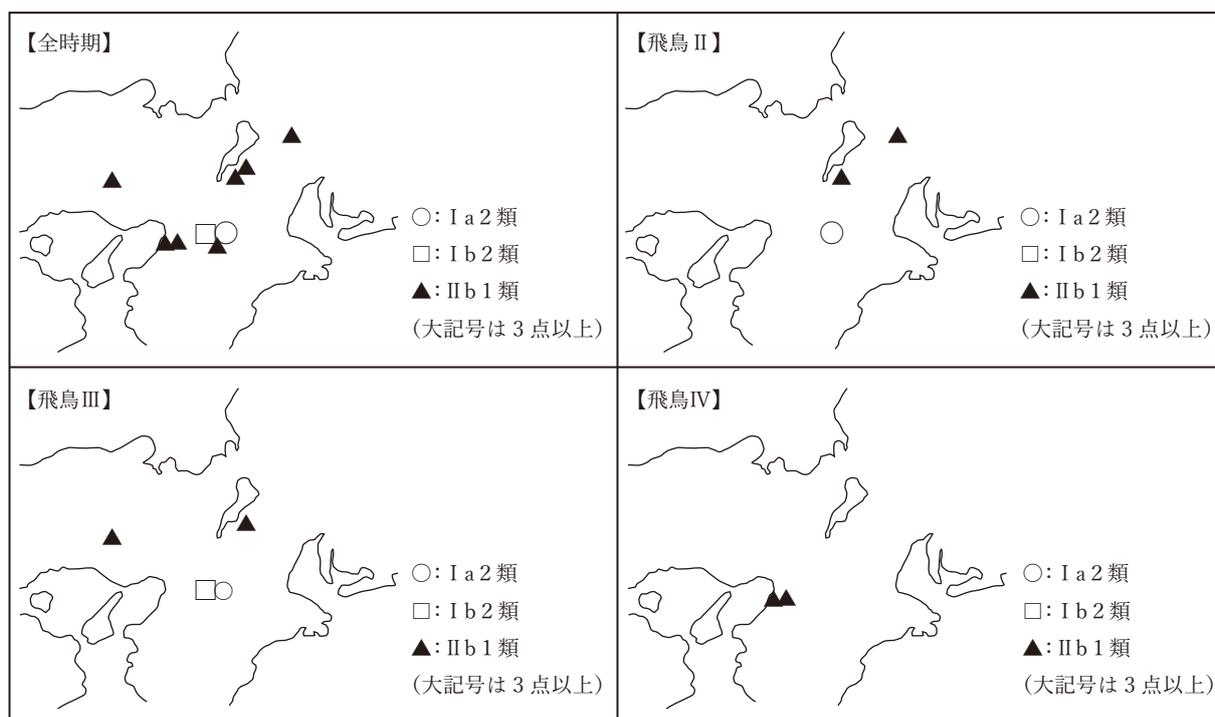


図4 長胴形陶棺の分布の変遷

法の簡素化である。I a類とII a類ともに、古段階のものは身に紐を通せる小孔をあけ、そこに紐を通して身と蓋を縛るといった手法がとられている。その後、時期が下ると身と蓋を結束する機能が失われ、身に蓋を被せる形態へと変化する。2つ目は小型化である。身・蓋ともに、時期が下るにしたがって小型化が顕著である。

このように長胴形陶棺は型式を問わず、身と蓋の結束方法の簡素化および全体の小型化という変遷をたどることがわかる。

Ⅲ. 分布からみた長胴形陶棺

長胴形陶棺の分布はこれまでのところ現在の岐阜県から兵庫県までと、きわめて狭い範囲で知られている。またこの分布域のなかでもさらに偏在している。具体的には現在の岐阜県から滋賀県にかけての地域と、奈良県北部にまとまりがあり、これに加えて各地域に点在する。この分布の時期的変遷を追い、その背景を探る(図4)。

長胴形陶棺の使用が開始される飛鳥Ⅱでは、奈良県北部に分布の中心があり、滋賀県にも分布が認められる。陶棺の型式はI a2類とII a1類で、前者は奈良県北部、後者は滋賀県に分布し、両者の分布は重ならない。

飛鳥Ⅲでは引き続き奈良県北部に分布するとともに、兵庫県にも分布が広がる。陶棺の型式はI b2類とII a1類で、I a2類も引き続き存在する可能性がある。I類の長胴形陶棺は奈良県北部に、II類の長胴形陶棺は兵庫県に分布が知られている。

飛鳥Ⅳでは、現状では陶邑窯跡群周辺でのみ分布が確認されている。陶棺の型式はII a1類のみが知られる。

このように長胴形陶棺の分布は、I類のものについては存続期間を通じて、奈良県北部に集中することがわかる。この地域は、通有の土師質亀甲形陶棺が集中する地域と重なる。同一の埋葬施設で長胴形陶棺と土師質亀甲形陶棺が使用されている例もあることから、両者の間には強い関係性がうかがわれる。

一方II類のものについては、時期によって分布の中心が見出せる状況にはない。飛鳥Ⅳについてのみ陶邑窯跡群内での出土であることから、須恵器生産や須恵質陶棺との関係が考慮されよう。飛鳥ⅡおよびⅢのものについては採用する地域の独自性ということになるか。この独自性が生まれる背景であるが、こちらも須恵質陶棺と

の関係を考えたい。これについては後述する。

II類の長胴形陶棺で最古段階の例としては新開西3号墳例があげられる。新開西3号墳が所在する近江は、須恵質陶棺が複数分布することが知られている。このような須恵質の棺を使用する地域の特性で、II類の長胴形陶棺が創出されたと考えたい。その後、近江の隣接地域である美濃等にも広がっていったと考えたい。

Ⅳ. 使用古墳からみた長胴形陶棺

(1) 具体的な出土状況

これまでに出土状況に関する情報が一定以上知られている例は限られている。これらはいずれも古墳等の埋葬施設からの出土となっており、窯跡等の生産遺跡や集落遺跡からの出土例はこれまでに知られていない。

出土状況が判明している事例は横穴式石室が2例で、横穴墓が4例である。以下、具体的な出土状況をみていく。

新開西3号墳(佐伯ほか2004)(図5) 新開西古墳群は、中期の古墳群として著名な新開古墳群と同一丘陵上西側に立地する、4基の古墳からなる古墳群である。3号墳は一辺11mの方墳で、南に開口する無袖式横穴式石室を主体部とする。

埋蔵施設の残存状況は良くないが、長胴形陶棺は玄室中央に、石室主軸に平行するかたちでおさめられたと判断できる。石室内にはほかの棺はなく、長胴形陶棺を用

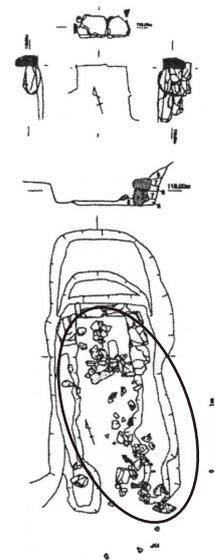


図5 新開西3号墳長胴形陶棺出土状況

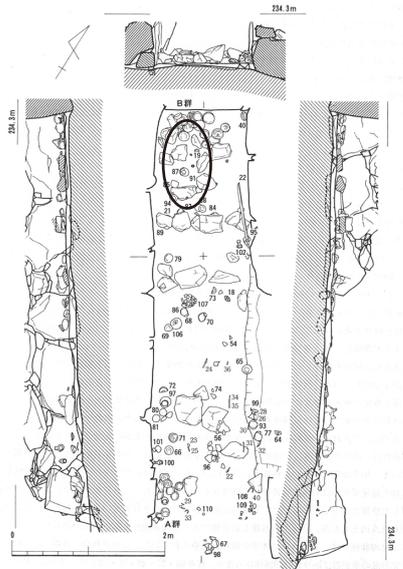


図6 沢の浦2号墳長胴形陶棺出土状況

いた単葬である。須恵器坏身と土師器甕が出土している。出土土器から飛鳥Ⅱの築造と考えられる。

沢の浦2号墳（市橋編 1987）（図6） 沢の浦古墳群は、2基の古墳からなる古墳群である。2号墳は径9mの円墳で、無袖式横穴式石室を主体部とする。石室内には計3面の埋葬面が確認されており、長胴形陶棺はそのうちの最終埋葬面に伴う。

長胴形陶棺は石室の奥、右側壁沿いに、石室主軸に平行するかたちで置かれていた。陶棺に明確に共伴する遺物は確認されていないが、石室内の出土遺物から7世紀中葉以後とされ、飛鳥Ⅲと考えられる。

赤田9号横穴墓（池田編 2016）（図7） 赤田横穴墓群は、これまでに23基の横穴墓が確認されている。横穴墓群中に入り込む谷により、大きく東群（1～9号墓）と西群（10～23号墓）に大別される。これまでの発掘調査の結果、多くの横穴墓で土師質亀甲形陶棺が使用されていたことが判明している。このうち9号横穴墓は南西方向に開口する玄室長5.7×2.5m、全長24.7m以上の横穴墓である。

赤田9号横穴墓では計3棺の棺がおさめられていたが、このうち1棺が土師質亀甲形陶棺で、残り2棺が長胴形陶棺である。土師質亀甲形陶棺が玄室中央やや東よりに置かれ、長胴形陶棺が奥壁と西壁沿いに置かれる。3棺とも同一面上で出土しているため明確な埋葬順序は不明であるが、土師質亀甲形陶棺の位置が中央からやや

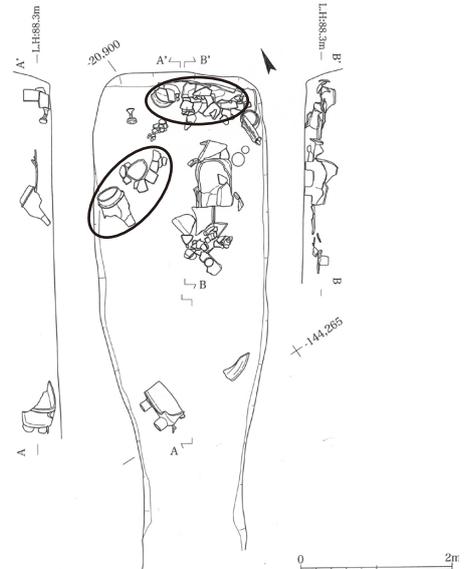


図7 赤田9号横穴墓長胴形陶棺出土状況

偏っているのは、壁沿いに長胴形陶棺が設置されたためと想定されている。共伴遺物には須恵器、土師器などがあり、時期は7世紀中頃で飛鳥Ⅱである。赤田9号横穴墓は東群中で最後に造墓されたと考えられる。

なお赤田横穴墓群では18号墓でも、長胴形陶棺が出土している。18号墓では、木棺を安置した棺台が確認されており、少なくとも2回以上の追葬があるとされている（奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター 2021）。

宝来6号横穴墓（森本 1924、前田・絹島 2021）（図8） 宝来横穴墓群は、これまでに13基の横穴墓が確認されている。このうち6号横穴墓では、陶棺は明治14(1881)年に出土しており、当時の状況を森本六爾が聞き取りをおこなっている（森本 1924）。6号横穴墓は「西面したもの」で、「プランは長方形に近似し、断面は屋根型をなすものであって、幅五尺、長さ一間半以上、高さまた五尺」とされ、陶棺は横穴墓の玄室の主軸に平行するかたちで、4棺が並んで置かれていたようである。また陶棺は蓋が上に来るように設置されており、いずれも身の中位までが土に埋まっていたということである。共伴遺物は知られていない。

（2）出土状況からみた長胴形陶棺

ここまで長胴形陶棺の使用状況について、実際の出土事例からみてきた。長胴形陶棺は多くの場合、埋葬施設

内の初葬棺ではなく追葬棺、なかでも最終埋葬棺として用いられている事例が多いことがわかる。あるいは古墳群中の最終築造古墳で用いられる例もある。このことから長胴形陶棺の被葬者は、集団の中でも中心的ではなく従的な性格であったと想定できる。

副葬品については共伴遺物が知られている事例が少なく、伴う場合も土器に限られる例が多い。このことから副葬品から長胴形陶棺の被葬者の性格を追うことは難しい。しかし副葬品が土器に限られることが一般的であるということは、先ほどの見解を補強する材料となろう。このように長胴形陶棺は出土状況から、集団内での地位が中心的ではない被葬者に用いられる性格の棺と考えられる。

また長胴形陶棺の出土状況で注目される点に、陶棺の使用時の設置方向があげられる。以下型式ごとに様相をまとめる。

I a2 類の長胴形陶棺は、赤田 9 号横穴墓出土の 2 棺はいずれも底部を底にして立てた状況で使用されていたと想定されている。一方で赤田 18 号墓では、出土状況から横倒しにして使用されていたことがわかる。これに対して I b2 類の長胴形陶棺はこれまで宝来 6 号横穴墓でのみ確認されているが、これらはいずれも横倒しにして使用されていたとされている。このように I 類の長胴形陶棺は、立てて使用するものから横倒しにして使用するものへと変化するものと考えられる。

II a1 類の長胴形陶棺は、他の型式よりも長期間にわたって用いられている。飛鳥 II の新開西 3 号墳では残存状況がよくないものの、横倒しでの使用と考えられる。また昼飯丸山例についても、残された記録から横倒しにして用いられていたことが読み取れる。続く飛鳥 III の沢の浦 2 号墳、そして飛鳥 IV の原山 4 号墓でも横倒しでの使用が確認されている。このように II a1 類の長胴形陶棺は、一貫して横倒しでの使用がおこなわれていた。

ここまで長胴形陶棺の使用時の設置方向についてみてきた。長胴形陶棺は、I a2 類の最初期でのみ立てた状況で使用されるが、原則的には横倒しで使用されることがわかる。古墳時代の埋葬は遺体を横たえることが一般的であり、このような立てた状況での使用はきわめて例外的である。この意味については須恵器や土師器の甕などをを用いた転用棺の状況も含めて、今後とも検討してい

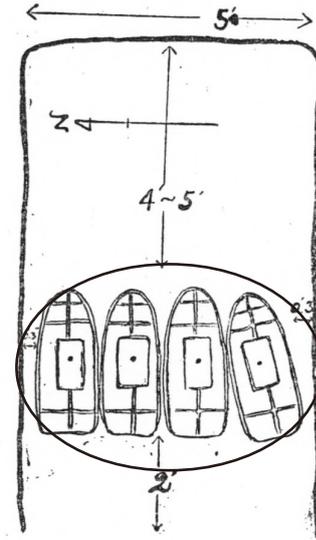


図8 宝来6号横穴墓長胴形陶棺出土状況

く必要がある。現状では問題点を指摘するにとどめ、今後の課題としたい。

(3) 使用古墳からみた長胴形陶棺

長胴形陶棺の分布には大きな偏りがあることは、先にも述べたとおりである。では、どのような古墳で、長胴形陶棺は用いられるのであろうか。長胴形陶棺の型式ごとに、出土古墳の性格をみていく。

I a2 類の長胴形陶棺は、赤田横穴墓群からの出土例である。現状では 9 号墓から 2 基、18 号墓から 1 基の出土である。また奈良市中町出土例も、これに該当する。

赤田横穴墓群において、9 号墓では土師質亀甲形陶棺が初葬時に用いられ、その後に長胴形陶棺が 2 棺用いられている。時期は飛鳥 II で、横穴墓群中でも最終段階での埋葬となる。18 号墓でも初葬には木棺が用いられ、長胴形陶棺は追葬棺として用いられる。赤田横穴墓群は横穴墓群全体で土師質亀甲形陶棺を多用しており、使用される棺の種類という観点から非常にまとまりの高い横穴墓群であるといえる。

なお奈良市中町出土例は土師質亀甲形陶棺とともに同一横穴墓中で使用されていた可能性が高いと推測されているが(鐘方 2016a)、横穴墓の規模をはじめ、周辺にもほかに古墳や横穴墓があったかなど、詳細は不明である。

I b2 類の長胴形陶棺は、現状では宝来 6 号横穴墓か

らの出土が知られているのみである。宝来横穴墓群はこれまでに4基の横穴墓が発掘調査されたのみであり、その全容について不明な点が多い。横穴墓群全体としては、出土土器からTK209型式期には造墓が開始されたと考えられるが(清水1992)、造墓のピークや停止時期については不明である。6号横穴墓についても発掘調査はおこなわれておらず、その築造時期等については不明瞭である。ただし横穴墓群全体の造墓期間から飛鳥Ⅱ前後の築造と考えられ、陶棺の時期も同様と判断される(前田・絹島2021)。

Ⅱ a1 類の長胴形陶棺の分布は、おもに岐阜県から滋賀県にかけての地域と大阪府や兵庫県で、Ⅰ a2 類あるいはⅠ a2 類の長胴形陶棺とは分布域が異なる。このうち出土古墳についての詳細が発掘調査を通じて判明しているのは、新開西3号墳や原山4号墓、沢の浦2号墳などである。また昼飯丸山例などは出土時の記録が残されており、使用状況をうかがい知ることができる。その多くが横穴式石室をはじめとした石室で採用されている。出土遺物についても須恵器など土器類のみを副葬する例が多い。そのため被葬者の性格を検討することは困難であるが、このうち原山4号墓は性格を探るうえでひとつの手がかりとなる。原山4号墓は陶邑窯跡群内に立地し、墓室自体も陶製品を組み立てたきわめて特殊な構造である。このことから、その被葬者には須恵器生産との関係が強く示唆されている。翻って他の出土例をみると、昼飯丸山例は興味深い。昼飯丸山例の出土地には、丸山古墳群や東中尾古墳群、西中尾古墳群が候補としてあげられる。これらの古墳群が立地する金生山から派生する東中尾尾根筋の南麓は、当地域では数少ない須恵器窯が分布する地域である。これまでに社宮司古窯跡や東山田古窯跡、そして遊塚古窯跡が知られている。このことから昼飯丸山古墳例についても、須恵器生産と何らかの関係を考慮してもよいかもしれない。

一方、沢の浦2号墳周辺ではこれまでに須恵器窯は確認されておらず、須恵器生産との関連は不明である。今後近隣で須恵器窯が確認されるかもしれないが、本例で注目すべき点に、中位埋葬面で出土した頭椎大刀と考えられる銀象嵌大刀がある。被葬者を軍事、祭祀を職掌とする楯縫氏の影響下にあり、軍事的色彩の強い部民の長とする指摘は興味深い(市橋編1987)。このような被

葬者をもつ古墳に長胴形陶棺が追葬されているということは、長胴形陶棺は須恵器生産にとどまらず、多様な職掌と関連することを示唆するのかもしれない。この点についてはより詳細な検討が必要である。なお、新開西3号墳や寺山古墳についても須恵器生産の拠点である鏡山北麓窯跡群と瀬田丘陵遺跡群の中間に位置しており、今後の検討が必要である。

ここまで型式ごとに、長胴形陶棺使用古墳についてみてきた。Ⅰ a2 類の長胴形陶棺は赤田横穴墓を中心として使用されている。赤田横穴墓群は横穴墓という埋葬施設をはじめ土師質亀甲形陶棺を多数用いるなど、きわめて画一性の高い群集墳である。その被葬者にはまとまりの強い集団が想定され、その立地や内容から土師氏が想定されている(池田編2016など)。このような場所でⅠ類の長胴形陶棺が創出されたということは、その性格を考えるうえで重要である。

Ⅰ b2 類の長胴形陶棺は、宝来横穴墓群でのみ確認されている。宝来横穴墓群では6号横穴墓を除き、これまでに亀甲形をふくめて陶棺の使用は知られていない。鉄釘が出土する横穴墓が複数あることから、釘結合式木棺が使用されていたようである。宝来横穴墓群が赤田横穴墓群のように土師氏との関連があるのかは判断が困難であるが、Ⅰ b2 類の長胴形陶棺はⅠ a2 類のものから、製作技法や使用方法から連続性を追うことができる。このことからⅠ a2 類、Ⅰ b2 類を含むⅠ類の長胴形陶棺は、のちに土師氏として紐帯をもつ集団ときわめてつながりが強い棺であったと考えられる。

Ⅱ a1 類の長胴形陶棺は、原山4号墓が須恵器生産との関連が強くうかがわれる。また昼飯丸山例等についても同様の可能性があるが、現状では沢の浦2号墳では須恵器生産との関係を追えない。一方、沢の浦2号墳では軍事的色彩の強い部民との関係が指摘されている。このようにⅡ a1 類の長胴形陶棺は須恵器生産との関連が考えられるが、これにとどまらず多様な職掌との関係も考慮されるべきである。この点については今後の検討課題としたい。

V. まとめと今後の課題

長胴形陶棺はきわめて短期間、かつ限定的な地域でのみ採用される棺である。そのためその性格や位置づけを

考えるうえでも不明な点多々あった。本稿で明らかとした点は、以下のとおりである。

長胴形陶棺の形態およびその変遷については型式を問わず、身と蓋の結束方法の簡素化および全体の小型化という変遷をたどる。

I類の長胴形陶棺は、存続期間を通じて奈良県北部に集中する。土師質亀甲形陶棺が集中する地域と重なることから、両者の間には強い関係性がうかがわれる。一方II類の長胴形陶棺は、時期によって分布の中心が見出せる状況にはないが、須恵器生産や須恵質陶棺との関係が考慮される例が存在することは注意される。

II類の長胴形陶棺で最古段階の例としては新開西3号墳例があげられる。新開西3号墳が所在する近江は、須恵質陶棺が複数分布することが知られている。このような須恵質の棺を使用する地域の特性で、II類の長胴形陶棺が創出されたと考えたい。その後、近江の隣接地域である美濃等にも広がっていったと考えたい。

長胴形陶棺の被葬者像についてはI類が、のちに土師氏として紐帯をもつ集団ときわめてつながりが強いことがわかる。一方II類は、須恵器生産との関連が推察される。このように長胴形陶棺は、特定のアイデンティティをもつ集団と結びつきが強い棺といえよう。

ここまで長胴形陶棺の性格と位置づけについて検討してきたが、検討すべき課題は多数残されている。長胴形陶棺の出現期にあたる、I a2類では立てた状況で使用される。古墳時代の埋葬は遺体を横たえることが一般的であり、立てた状況での使用はきわめて例外的である。この意味を検討していくことによって、長胴形陶棺創出の意味が鮮明になるものと思われる。

長胴形陶棺の被葬者像については、I類がのちに土師氏として紐帯をもつ集団との関係を、II類は、須恵器生産との関連を推察した。しかし集団内すべてで長胴形陶棺が採用されているわけではないので、採用の違いの背景はさらなる検討が必要である。また先にも指摘したとおり、今後の検討によって他の集団との関係もあらたに見出せる可能性もあろう。

これらについては引き続き検討し、長胴形陶棺についてさらなる性格の解明と位置づけをおこなう必要がある。

註

- 1) 京都府八幡市松井40号横穴墓出土陶棺（公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター2018）は、脚部が無い点、身の上面の一部を切り取り蓋部とするなど長胴形陶棺と共通する特徴をもつ。一方で、松井40号横穴墓出土陶棺は長側面に底面があり、その形態・製作技法は、脚部を持たないが、典型的な亀甲形陶棺と共通する。そのため本稿では、松井40号横穴墓出土陶棺は長胴形陶棺には含めない。
- 2) 土器の年代は田辺昭三（田辺1981）、西弘海（西1982）による。

参考文献

- 池田裕英（編）2016『赤田横穴墓群・赤田1号墳』奈良市教育委員会
- 梅原末治 1917「近江國野洲郡守山町字立入古墳調査報告」『考古学雑誌』第7巻第11号 考古学会 pp.35～41
- 市橋重喜（編）1987『沢の浦古墳群』兵庫県教育委員会
- 鐘方正樹 2016a「赤田横穴墓群周辺出土の土師質陶棺資料」『赤田横穴墓群・赤田1号墳』奈良市教育委員会 pp.162～173
- 鐘方正樹 2016b「第VI章 総括 第2節 陶棺」『赤田横穴墓群・赤田1号墳』奈良市教育委員会 pp.177～187
- 木村泰彦 1979「山城地方出土陶棺集成」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第1集 長岡京跡発掘調査研究所 pp.33～78
- 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018『京都府遺跡調査報告集第171冊』
- 佐伯英樹・松村治・森智美 2004『新開西古墳群』栗東市教育委員会
- 清水康二 1992「宝来横穴墓群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1991年度（第一分冊）』奈良県立橿原考古学研究所
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 中井正幸 2004「古墳終末の一樣相～岐阜県大垣市丸山出土の長胴棺をめぐって～」『かにかくに』八賀晋先生古稀記念論文集刊行会 pp.252～261
- 中西常雄 2014「近畿地方土器棺の基礎的研究—5～8世紀—」『古文化談叢』第72集 古文化研究会 pp.63～129
- 奈良市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター 2021『赤田横穴墓群第6次調査』

西弘海 1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』平凡社 pp.447～472

前田俊雄・絹島歩 2021「宝来横穴墓群出土陶棺」『森本六爾関係資料集Ⅳ』由良大和古代文化研究協会 pp.43～51

間壁葎子 1983「岡山の陶棺—白猪屯倉への一私見」『岡山の歴史と文化』藤井駿先生喜寿記念会 pp.41～72

光本順 2001「6・7世紀における陶棺の変容とその特質—定東塚・西塚古墳出土陶棺の評価によせて—」『定東塚・西塚古墳』岡山大学考古学研究室 pp.257～290

森本六爾 1924「異形の陶棺を發見したる大和國生駒郡伏見村實來字中尾の遺跡について」『考古学雑誌』第14巻第5号 日本考古学会 pp.42～61

図4 筆者作成

図5 佐伯英樹・松村治・森智美 2004『新開西古墳群』栗東市教育委員会 を改変

図6 市橋重喜（編）1987『沢の浦古墳群』兵庫県教育委員会 を改変

図7 池田裕英（編）2016『赤田横穴墓群・赤田1号墳』奈良市教育委員会 を改変

図8 森本六爾 1924「異形の陶棺を發見したる大和國生駒郡伏見村實來字中尾の遺跡について」『考古学雑誌』第14巻第5号 日本考古学会 を改変

挿図出典

図1 1～3:池田裕英（編）2016『赤田横穴墓群・赤田1号墳』奈良市教育委員会、4・6:前田俊雄・絹島歩 2021「宝来横穴墓群出土陶棺」『森本六爾関係資料集Ⅳ』由良大和古代文化研究協会、5:伏見町史刊行委員会 1981『伏見町史』、7・8:宮野淳一・山川登美子（編）1990『陶邑Ⅶ』大阪府教育委員会、9・10:梅原末治 1917「近江國野洲郡守山町字立入古墳調査報告」『考古学雑誌』第7巻第11号 考古学会、11:市橋重喜（編）1987『沢の浦古墳群』兵庫県教育委員会、12:佐伯英樹・松村治・森智美 2004『新開西古墳群』栗東市教育委員会、13:中井正幸 2004「古墳終末の一樣相～岐阜県大垣市丸山出土の長胴棺をめぐって～」『かにかくに』八賀晋先生古稀記念論文集刊行会

図2 池田裕英（編）2016『赤田横穴墓群・赤田1号墳』奈良市教育委員会、前田俊雄・絹島歩 2021「宝来横穴墓群出土陶棺」『森本六爾関係資料集Ⅳ』由良大和古代文化研究協会、市橋重喜（編）1987『沢の浦古墳群』兵庫県教育委員会

図3 1・2:池田裕英（編）2016『赤田横穴墓群・赤田1号墳』奈良市教育委員会、3:前田俊雄・絹島歩 2021「宝来横穴墓群出土陶棺」『森本六爾関係資料集Ⅳ』由良大和古代文化研究協会、4:佐伯英樹・松村治・森智美 2004『新開西古墳群』栗東市教育委員会、5:市橋重喜（編）1987『沢の浦古墳群』兵庫県教育委員会、6:宮野淳一・山川登美子（編）1990『陶邑Ⅶ』大阪府教育委員会